

石灰質ナノ化石からみたパナマ地峡開閉に伴う鮮 新世環境変動

著者	高山 俊昭
著者別表示	Takayama Toshiaki
雑誌名	平成9(1997)年度 科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究概要
巻	1996 1997
ページ	2p.
発行年	1996-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00066084



石灰質ナノ化石からみたパナマ地峡開閉に伴う鮮新世環境変動

Research Project

All ▼

Project/Area Number

08454149

Research Category

Grant-in-Aid for Scientific Research (B)

Allocation Type

Single-year Grants

Section

一般

Research Field

Stratigraphy/Paleontology

Research Institution

Kanazawa University

Principal Investigator

高山 俊昭 金沢大, 教養部, 教授 (40004361)

Co-Investigator(Kenkyū-buntansha)

佐藤 時幸 秋田大学, 鉱山学部, 助教授 (60241668)

Project Period (FY)

1996 - 1997

Project Status

Completed (Fiscal Year 1997)

Budget Amount *help

¥5,300,000 (Direct Cost: ¥5,300,000)

Fiscal Year 1997: ¥1,300,000 (Direct Cost: ¥1,300,000)

Fiscal Year 1996: ¥4,000,000 (Direct Cost: ¥4,000,000)

Keywords

石灰質ナノプランクトン / 深海掘削計画 / パナマ地峡 / パリマ / カリブ海 / 北大西洋

Research Abstract

本年度考察の対象としたのは、国際深海掘削計画(IPOD-ODP)LEG 94,138、165、166の掘削地点606,607,609,610(いずれも北大西洋),844,846,850(いずれも東部赤道太平洋),998と999(カリブ海),1006(パリマ)で得られた下部中新統から鮮新統に至る深海堆積物試料である。試料中の石灰質ナノ化石を検鏡,同定し,化石群集の時代的変遷を明らかにした。その結果得られた成果は下記の通りである。

パナマ地峡両側の太平洋,大西洋海域での石灰質ナノ化石群集の時代的変遷は,どちらもさまざまな種の消長を繰り返すが,Discoaster tamalis絶滅の層準より上位でカリブ海域とパリマ海域の化石群集に共通点がみられるようになる。このことからパナマ地峡が閉塞したのは2.82Maで,これを境にして大西洋ではメキシコ湾流の発達がみられるようになったと考えられる。

一方 北大西洋の更新統中の石灰質ナノ化石群集を4掘削地点と比較すると,低緯度から高緯度海域に向かって産出種数がわずかながら減少し,群集組成が単調になる傾向がみられる。産出類のいくつかは暖流域,あるいは寒流域に特徴的なものであることが明らかとなった。とくにCoccolithus pelagicusは寒冷種として際だっている。この北大西洋海域で得られた成果をもとに石灰質ナノ化石種に基づく温度スケールを作成し,このスケールを用いて,パナマ地峡閉塞後の太平洋,大西洋の海峡変化を今後明らかにする。

Report (1 results)

1996 Annual Research Report

URL: <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-08454149/>

Published: 1996-03-31 Modified: 2016-04-21